

二〇一八年 年頭司牧書簡

「札幌教区第二世紀の第一歩」

司教 ベルナルド 勝谷 太治



=新司教館（札幌教区カトリックセンター）南東面からの全景（昨年末現在）=

新年にあたり札幌教区の皆様にご挨拶と祝福を送ります。まず今年はじめに皆さんに報告したいことは、長年念願であった新しい新司教館（札幌教区カトリックセンター）が間もなく完成することです。皆さんの温かい支援によって2月10日に竣工式が執り行われることになりました。一階は様々な集会や会議に対応できる多目的ホール。二階は教区本部事務所をはじめ各事務所や委員会室が入っています。三階は各室バストイレ付ビジネスホテルシングルルーム仕様で12人ほどが宿泊できる宿泊研修施設。四階

は常住の司教、司祭のプライベート階になります。地下一階は納骨堂となっており、間も無く販売開始する予定です。また、一階には光明社の出店（でみせ）となるキリスト教関係図書、聖具の店「ラベルナ」が出店します。新しいセンター、是非、有効に利用して下さい。

さて、昨年は第二世紀への歩みを始めた札幌教区の諸課題に対して、教区の宣教司牧評議会や、その他様々な場での具体的な検討を始めました。その具体的な成果の一つが「ハラスメント対応窓口」の設置です。各地区等で説明会を行い、各小教区へ案内を通知しているの、皆さんこのことについてはご承知のことと思います。開設当初、相談がたくさん来るのではないかと担当者は構えていたのですが。期待に反して？と言うより幸いなことにま

だ一件の相談もありません。しかし、重大な件でなくとも、ハラスメントは加害者の自覚がないことが多く、問題がまだ小さいうちに対応をする必要があります。問題を感じた時は、担当デスクに連絡をください。

次に、青少年の育成のために、ミッシヨンスクールとの連携を課題としてあげていましたが、昨年大きな動きがありました。旭川と北見の藤女子高等学校二校を学校法人「北海道カトリック学園」に経営移管する為の協議に入り、来年（2019年）四月の移管、共学化を目指しています。まだ、協議中で流動的ではありますが、この計画が実現した場合、教区（宗教法人）とは違う学校法人の運営する学校という考え方ではなく、理事長や理事が司教や司祭ですので、あえて「教区立の学校」と呼び、教会との連携を模

索したいと考えています。生徒の活動と小教区の活動をリンクさせたり、教区の行事へ生徒の参加を促したりして、小教区や青少年活動の活性化を目指したい考えです。また、時機を見て教区に「学校教育諮問委員会」を設置したい考えです。

更に、青少年については日本に限らず教会の重点課題です。バチカンで開かれる今年の世界代表司教会議（シノドス）のテーマは「若者、信仰、そして召命の識別」です。若者を教会に呼びもどすため単に彼らに迎合するのではなく、彼らを生かす信仰の価値と喜びを如何に見出し表現するか。そのために教会がどう変わる必要があるのかを考えます。教会が青年に語って聞かせるのではなく、若者が教会に何を伝えようとしているのか、まず若者自身に耳を傾ける必要があります。老

人の視点で教会が若者を語るのではなく、若者に教会を語ってもらう必要があるのです。昨年、シノドス予備調査の為の準備アンケートが全世界に配布されました。そこには、若者に関わっている司牧者だけではなく、できるだけ若者自身に直接答えてもらうようにと書かれていました。そのように依頼文をつけて日本全国の教区に配布しました。集められたアンケートの結果は、全国一様に若者の教会離れの深刻な現状が書かれていましたが、何より深刻に感じたのは、上の依頼にもかかわらず、若者自身が回答したアンケートがほとんどなかったということです。

そして、バチカンでは各国から代表として若者を招き、直接その声を聞き、話し合う集まりが開かれます。日本では代表選出に大変手間取りまし

た。誰を派遣するか選抜するのに苦勞したからではなく、派遣する人材がない為に探すのに苦勞をしたのです。当然、札幌教区の青年たちにも声をかけましたが、派遣する適任者を見つけれませんでした。適任者はいるはずですが、従来の教会組織を通してでは彼らとつながらないのです。

とはいえ、若者の活動は、昨年も触れましたが地道にその活動を続けその輪を広げ始めています。信者の青年のみならず、先に触れたミッションスクールの若者を含めた企画が多くなされコミュニケーションの輪を確実に広げています。しかしながら、小教区に青少年の姿が見られない現状は変わっていません。これは引き続き考えていかなければならないことです。青少年のことについては、一人の教区の担当者や、自分の小教区のことだけ

に関わる教会役員ではなく、地区や教区の教会全体で取り組んで行くべき大切な課題です。その為の仕組みを考えたいきましょう。

次に私たちに問いかけられている緊急の課題は、多くの外国籍の方々の存在です。教会は現在「排除ZEROキャンペーン」に取り組んでいます。

特に移民や難民のことを念頭に置きながら排除されるべき人間は一人もいないと訴えています。そして、今年の教皇様の元旦の平和メッセージは、まさにこのことについての内容でした。日本が難民を受け入れないことも問題ですが、現在日本において社会問題となっているのは、技能実習生の就業態です。彼らの多くが制度の隙間をくぐり抜けた不当な扱いを受けています。ひどいケースも多々あり、現代の奴隷制度とまで言われています。

北海道にも沢山の実習生がおり、少なからぬ人数がカトリックです。しかし、人権に関わる問題は信者であるかどうかは関係ありません。私たちに關わりのあるすぐ身の回りで起こっていることなのです。最近も札幌の教会関係で彼らの一人を保護する事態が発生しており、教会としての対応が問われています。彼らが教会のミサに来て教会が活性化するのは大変喜ばしい事ですが、更に彼らの生活に寄り添い、必要な支援ができる体制を作ることが必要です。今後難民移住移動者委員会の活動を充実させてこれらの課題に取り組む態勢を作っていきます。

その他、現在取り組んでいる事柄で、教会間の経済的相互協力を実現する為の小教区資金の有効活用や、今後の宣教司牧体制についても継続して協議されています。これらは信徒の高

齢化と、司祭の減少、そして建物の老朽化という切羽詰まった状態を反映したもので、今後加速度的に進むものと予想されます。その中で、改めて私が司教になってすぐに提示したビジョン、「信徒中心の教会」、「信徒による教会運営」を目指して司祭不在でも信仰を維持発展できる共同体づくりに取り組んでいただきたいと思います。ともすれば建物の維持管理に関心が向かってしまいがちですが、大切なことはその建物を利用する共同体の存在です。確かに教会を運営するにあたり、司祭が常住しなくとも教会活動が適切に行われるように、その組織的な面において信徒の役割が重要視されるようになって来ました。典礼においても集会祭儀の司会者等の任命が行われるようになり、信徒の固有の役割が見直されて来ています。ただ、大切なことにまだ手がつけられて

いない気がしています。共同体を通しての信仰の養成、伝達。特に家庭という共同体を通しての信仰の伝達です。信仰は人が一人で獲得し、育てて行くものではありません。共同体の関わりを通して、受け継がれ育って行くのです。現在、家庭で家族揃って祈りの時を持つための祈りの手引きを用意しています。たとえ短い時間でも家族が毎日、例えば夕食の前などの五分間であっても、ともに捧げる祈りを通して自分の望みや関心事、そして他の家族のために祈る習慣は、積み重ねられる年月に比例して家族の絆を強める為の大きな信仰の恵みを与えてくれるでしょう。

更に、日本において大きな社会問題であり、教会内でも同様に見過ごされてはならないのが、高齢者のことです。特に家族と離れて、あるいは無縁

状態の中で、一人暮らしをしている高齢者に目を向け、寄り添い続ける事ができる共同体を目指すことが大切です。その為に、以前の司牧書簡で提案し続けている小共同体づくりを是非、地区や小教区で始めていただきたいと思います。全ての人が、かけがえない主における兄弟姉妹として互いに大切な存在であることを実感できる教会、私たちの共同体の中でも「排除される人が一人もいない」教会を目指して、主の助けを願いながら歩んで行きましょう。